

Brugada症候群の薬物負荷試験

ピルジカイニド負荷試験にて心室性不整脈が誘発されたBrugada症候群の5症例

芦野園子*¹ 渡辺一郎*¹ 小船雅義*¹ 川内千徳*¹ 山田健史*¹
小船達也*¹ 大久保公恵*¹ 橋本賢一*¹ 進藤敦史*¹ 杉村秀三*¹
中井俊子*¹ 國本 聡*¹ 齋藤 穎*²

*¹日本大学医学部附属板橋病院循環器内科部門

*²日本大学医学部先端医学講座

Brugada型心電図を呈する23症例に対し施行したピルジカイニド負荷試験中、心室性不整脈が誘発された5症例につき検討を行った。対象は34歳から72歳の男性4名、女性1名の計5症例。いずれも基礎心疾患はなく、無症候性であった。負荷試験前、5症例はいずれも12誘導心電図(ECG)上、不完全右脚ブロック(ICRBBB)とV₁、V₂誘導のST上昇を示すBrugada型心電図を呈していた。ST上昇のタイプ

はType 1:2例、Type 2:3例、Type 3:なしであった。ピルジカイニド計50 mg静注後、全例でV₁、V₂誘導のSTが増高後Type 1を呈し、4症例で単発性心室性期外収縮(PVC)、1症例で持続性心室頻拍(VT)が出現した。PVCはいずれも左脚ブロック型で、肢誘導でもとらえられた2症例においては下方軸を呈していた。一方持続性VTは右脚ブロック型、不定軸を呈していた。